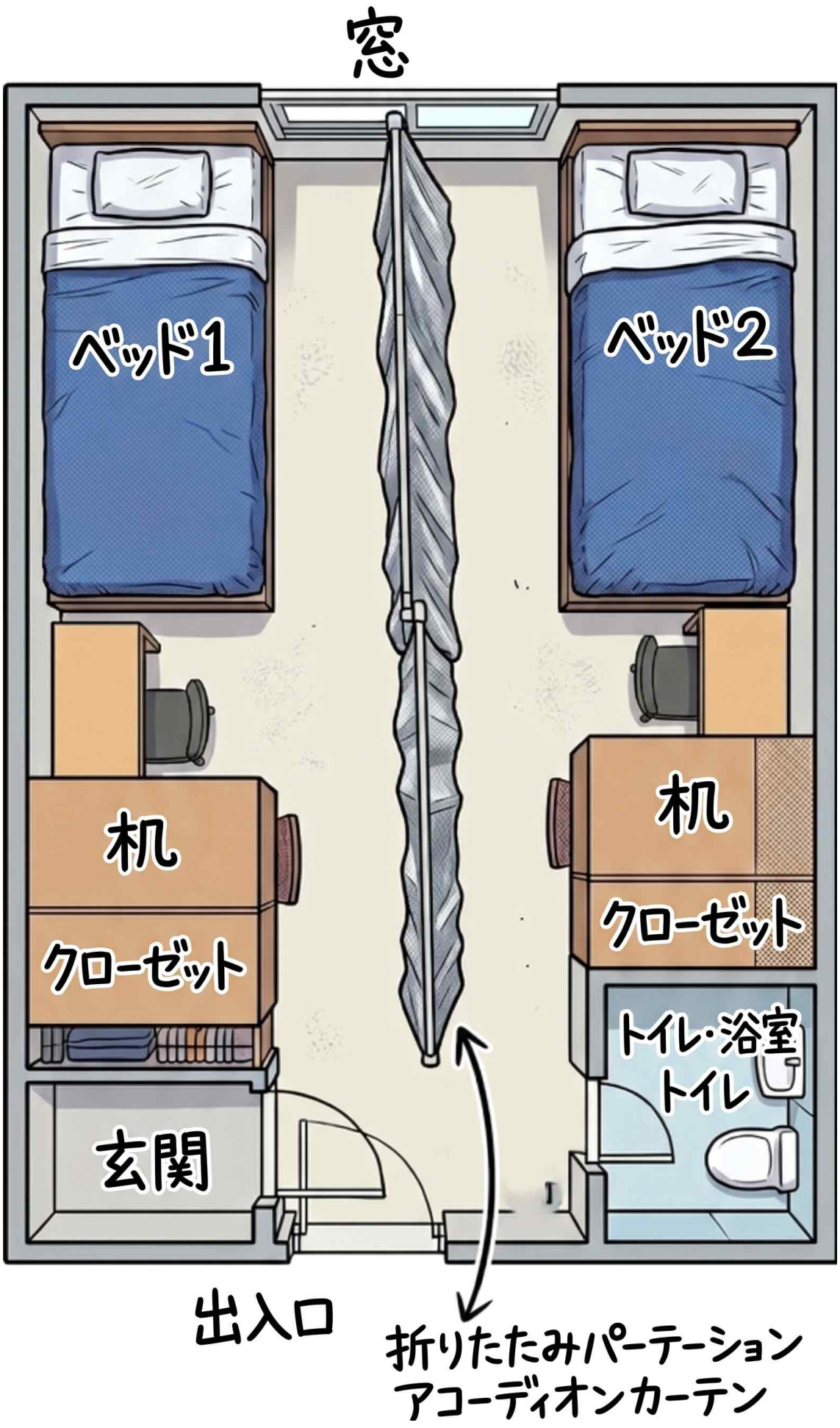



窓
ベッド1
ベッド2
机
クローゼット
机
クローゼット
トイレ・浴室
トイレ
玄関
出入口
折りたたみパーテーション
アコーディオンカーテン

【2015年2月28日 土曜日】

地方の2月末は思いのほか肌寒かった。ソウルとは少し違う、冷たい風が鼻先をかすめる。ヨン・ムンギョンは自身の背丈ほどもある大きなキャリーケースを慎重に引きずりながら、ロースクール専用寮『青雲館』の廊下を歩いていた。328号室。これから3年間、彼女が自らを証明し抜かねばならない空間だった。

電子錠の軽快な電子音とともに扉が開く。部屋の中は寮らしく整頓されていた。古びた隅々などなく、清潔なホワイトトーンの壁紙と明るい色合いの家具が目に入る。決して派手ではないが、ロースクール生のために学校側が細やかに気を配った痕跡が見て取れた。中央にはルームメイトとのプライバシー保護のため、薄い波状の折りたたみ式パーテーションが設置されている。

ムンギョンは荷物を中に入れ、ドアを閉めた。まだルームメイトは到着していないようだ。彼女はキャリーケースを入り口側に立てかけ、部屋の中をじっくりと見回した。間取り図で見た通り、窓側には二つのシングルベッドが並んで置かれ、その足元側に机とクローゼットが対称に配置された構造だった。

彼女はしばし机の前に立ち、椅子をそっと引いてみた。軋む音もなく滑らかに動く椅子が、この場所の快適さを物語っている。172cmの長身を持つ彼女が立つには少し手狭な感もあったが、勉強するには十分な空間だった。ムンギョンは窓際のベッドに視線を向ける。日差しのよく入る特等席だ。しかし彼女はすぐには荷解きをしなかった。ルームメイトが来てから、互いにどの場所を好むか尋ねて決めるのが筋というものだ。

彼女は机の椅子に静かに腰を下ろし、ふうっと一息ついた。ベージュのトレンチコートを脱いで膝の上に置くと、中に着ていたラフなホワイトニットが露わになる。ニット越しに、彼女の引き締まった肉体のシルエットが自然と浮かび上がった。172cmの長身にCカップのボリューム感は、彼女自身が望んで手に入れたものではなかったが、それは彼女の人生において常に予期せぬ変数を作り出してきた。

『合格してよかった。本当に……』

机の上に置かれた入室案内文をぼんやりと見つめながら、ムンギョンは胸を撫で下ろした。実のところ、今回のロースクール合格は彼女にとって奇跡に近いものだった。私立の名門、E大学法学部に合格した時までは、自分は当然のように司法試験に受かり、法曹になるものだと信じて疑わなかった。しかし、高校時代に抑圧されていた代償心理は、大学という自由に出会った途端、とんでもない方向へと弾け飛んだのだ。

彼女は大学時代、いわゆる『法大の女神』として通っていた。自分自身を冷徹に評価すれば、彼女の顔が韓国の上位1%に入るほどの完璧な美貌というわけではない。だが、『法大』という特殊な環境が彼女を独り勝ちの存在に仕立て上げたのだ。韓国で最も勉強ができる者たちが集う場所。そこの平均的な容姿は、残念ながら成績とは無関係に、平凡な水準を下回ることが多かった。

大半の女子学生は入学するや否や分厚い眼鏡をかけ、受験生特有のダボついたジャージ姿で図書館にこもっていた。そんな彼女たちの中で、172cmのすらりとした長身と生まれ持った骨格を持つムンギョンの登場は新鮮な衝撃だった。特別に着飾らなくても、ジーンズに白いTシャツ姿で教室に入るだけで、男子学生たちの視線は彼女に釘付けになった。先輩たちは学科の行事があるたびに彼女を呼び出し、同期たちは彼女の周囲をうろついて関心を引こうと必死だった。

その甘い関心に酔いしれ、ムンギョンは六法全書を開く代わりに友人たちと遊び歩き、大学生活を謳歌した。テスト期間でさえ、図書館よりカフェや繁華街の飲み屋にいる時間の方が長かった。少し勉強をおろそかにしても、彼女は依然として法学部の主役であり、人々は彼女の酷い成績すら『女神』の愛嬌混じりの失敗程度に片付けてくれた。工学部にアルムがいるなら、法学部にはムンギョンがいる。

だが、結果は正直だった。司法試験はおろか、卒業単位すらボロボロだった。同期たちが一人、また一人と考試村（受験生街）に向かい、あるいは法律事務所でインターンを始める中、彼女はついに自分が築き上げてきたものが砂上の楼閣であったことに気づいた。高校まで少し勉強ができたからといって、その後の人生まで保証されるわけではない。遅ればせながら我に返り、LEET（法学適性試験）の勉強を始めたものの、一度錆びついた頭を再び回転させるのは容易なことではなかった。ギリギリの成績と低い学点のせいで、ソウルの名門ロースクールはすべて彼女に背を向けた。

結局、彼女が受け取った合格通知はここ、地方の小さなロースクール一つだけだった。だが、ムンギョンに悔しさはなかった。むしろこの機会を与えられたことに心から感謝していた。今回こそ、くだらない遊びに振り回されず、本気で勉強してやると固く誓いながら荷物をまとめた。これ以上、20代前半のような生き方はできない。金のスプーン（裕福な家柄）をくわえて生まれたわけでもない。だからといって「就家（結婚逃げ）」するのは嫌だった。自分の知性が、どこかの男に嫁いだなどと嘲笑されるにはあまりにも惜しかったからだ。

ムンギョンはキャリーケースを開け、荷物の整理を始めた。カバンの中には、昔のような華やかな服よりも、勉強する時に着やすいTシャツやカーディガン、そして分厚い教科書陣が陣取っていた。彼女は落ち着いた動作でクローゼットの片隅に服を掛け、机の上に買い揃えた基本書を順に並べていった。

パーテーション一つを隔てて誰かとこの狭い部屋を共有しなければならないという事実は少し不慣れだったが、一方で胸の高鳴りも感じていた。同じ境遇で勉強するルームメイトなら、互いに支え合えるかもしれない。ムンギョンはトイレを一度確認した。自分の陣地になるかもしれない右側のスペースに隣接しており、使い勝手は良さそうだ。彼女は洗面台の鏡を見つめ、髪を軽く結び直した。鏡の中の自分の姿は、以前の華やかさよりも少しすっぴんのような素朴さを帯びていたが、その眼差しだけはかつてないほど真剣に燃えていた。

部屋の中は静寂に包まれていた。窓から差し込む午後の日差しが、机の上を暖かく覆う。ムン

ギョンはこの静けさと平穏が気に入った。たとえここが夢見ていた華麗なスタート地点ではなくとも、再出発するにはこの上なく最適な場所だと思えた。

その時だった。閉ざされた鉄扉の向こうから、廊下を響かせる足音が聞こえてきた。

『カツン、カツン、カツン……』

一定のリズムで近づいてくるヒールの音は、ムンギョンの部屋の前で正確に止まった。ムンギョンは無意識のうちに姿勢を正した。ルームメイトだろう。彼女はできる限り愛想のいい表情を作ろうと努めながら、ドアの方へと首を巡らせた。

電子錠が開く無機質な音が鳴り、重い扉がゆっくりと開かれた。

ドアの隙間から最初に見えたのは、洗練されたデザインの巨大な旅行カバンだった。そして続いて入ってきた女のシルエットを見た瞬間、ムンギョンの目は大きく見開かれた。

170cmほどに見えるすらりとした長身。ボディラインを強調するよりも優雅に落ちるダークネイビートーンのユート姿。だが、その地味な装いすら隠しきれない、弾力のある肉体の曲線と豊満な双丘のボリューム。何よりムンギョンを驚愕させたのは、その女の顔だった。

端正に整えられたミディアムボブの下に覗く、鋭くも洗練された顎のライン。そして、相手を見透かすような冷たく深い目元。それはムンギョンが大学時代、幼稚な対抗戦だの交流戦だのと囃し立てて遊んでいた定期戦のたび、向かいの観客席で自分と対極に立っていた、まさにあの女だった。

「……ユ・プルム？」

ムンギョンの唇から、小さくその名が零れ落ちた。C大法学部の象徴であり、洗練美の頂点と呼ばれ、ムンギョンとは常に目に見えない比較対象だった女。同い年として、そして各校の『顔』として、互いの存在を強烈に意識せざるを得なかったユ・プルムが、今、ムンギョンのルームメイトとしてその狭い扉を通り抜けようとしていた。

プルムもまたムンギョンを見つけ、ピタリと足を止めた。困惑が色濃く滲むプルムの瞳と、安堵の裏に隠れていたムンギョンの緊張感が、空中でバチバチと激しくぶつかり合う。2015年の春、二人の女の『共有』は、そうして予期せぬ再会とともに幕を開けた。

＊　＊　＊

【2015年2月28日 土曜日】

地方の2月末は残酷なほど気まぐれだった。雲の隙間から覗く日差しは暖かそうに見えたが、肌

を突き刺す風は相変わらず鋭利だった。ユ・プルムは急な坂道の途中で立ち止まり、荒い息を吐き出した。ロースクール専用寮『青雲館』は、キャンパスの中でも最も高い場所に位置していた。デコボコのアスファルトの上をキャリーケースの車輪が転がる音が、やけにけたたましく響き渡る。

170cmの長身にダークネイビートーンのロングコートをなびかせて坂を登る彼女の姿は、一見すると洗練されたキャリアウーマンの出張のようだった。だが、コートの内に滲む汗と、小刻みに震える太ももの筋肉は、彼女が直面している現実的な苦労を容赦なく暴露していた。荷物の重さは、まるでこの4年間彼女の肩をのしかかってきた落第の記録のように、ただただ重苦しかった。

プルムは荷物の取っ手を握り直し、再び足を踏み出した。実のところ、こんな遠くまで都落ちしなければならない事実に、プライドが傷ついていないと言えば嘘になる。だが、今回の合格通知を受け取った時に感じたあの目が眩むような安堵感を思えば、これくらいの坂道などどうってことはなかった。私立の名門、C大学法学部時代、彼女は常に話題の中心にいた。ユ・プルムは誰からも歓迎される『都会的でクールな女神』だった。

彼女の魅力は鮮烈なコントラストから生まれていた。洗練されたミディアムボブと鋭利な顎のライン、そして170cmにCカップという圧倒的なフィジカルは、冷たい都市の女の典型だった。しかしプルムは、その容姿の裏に誰よりもサバサバとした物怖じしない性格を隠し持っていた。彼女は男子の同期たちが通う薄汚れた食堂を嫌がらず、熱い湯気の立つスンデクッパをすすりながら焼酎のグラスを傾け、義理人情を語り合うことに慣れていた。美しい容姿に裏表のない性格まで兼ね備えた彼女に、男たちは熱狂した。彼らにとってプルムは憧れの的であると同時に、話の通じる頼もしい『アニキ』のような存在だった。実際のところ、アニキという名目で包装して、皆が心の片隅に彼女を抱いていたのだが。

だが、その華やかな『義理派の女神』の生活の裏に残されたのは、空虚な成績表だけだった。人々と群れてグラスを傾けている間に、民法の判例は頭の中で霞み、刑法の学説はごちゃ混ぜになった。同期たちが次々と司法研修院へと旅立っていく中、彼女は相変わらず大学前の居酒屋で後輩の悩みを聞いてやるだけの存在として取り残された。そうして過ごした数年間は彼女自身を蝕み、結局、パッとしないLEETの成績と低い学点というレッテルを貼られ、この地方ロースクールにまで押し出されることになったのだ。

プルムは寮の建物の前に到着し、重い荷物を下ろして乱れた服を整えた。周囲からは、彼女の容姿と学歴なら適当に条件のいい家柄の男に嫁げばいいのに、という声も少なからず聞こえてきた。だが、そう言われるたびに、プルムの腹の底からは得体の知れない反発心が沸き上がった。

誰かの妻や嫁として定義される人生、自分の知性が誰かの賢くて美しいトロフィーに成り下がり、静かに奥方として枯れていく人生など、考えただけでも反吐が出た。彼女は自分の頭脳を惜しみ、自らの力で築き上げた知性が他人に嘲笑されることに耐えられなかった。専門職として堂々と自分の名を掲げ、自立する人生。それこそが、ユ・プルムの譲れないプライド（意地）

だった。

青雲館の中に入ると、外の寒気とは対照的な、暖かく快適な空気が彼女を出迎えた。ロースクールの寮らしく廊下は静粛で、設備は現代的で清潔だった。プルムはエレベーターの鏡に映る自分の姿をもう一度確認した。ダークネイビーのコートの下から覗くスリムな脚のラインと、優雅に落ちるワンピースのシルエットは依然として完璧だった。彼女はもう二度と、大学時代のように人々とつるんで時間を浪費すまいと心に誓った。3年間だけ死んだように勉強に専念し、実力で自分を証明してやるという覚悟だった。

『ルームメイトはどんな人間だろう。どうか私と似たような性格であってほしいけど』

口には出さない期待感がプルムの頭の中を駆け巡った。彼女は複雑な人間関係に疲れ果てていた。ただ互いの境界線を守り、配慮と沈黙の中で各自の勉強に集中できる、常識的なパートナーを望んでいたのだ。

『カツン、カツン、カツン』

プルムは一定のリズムで廊下を歩いた。彼女の歩みには特有の自信とともに、新たな始まりを控えた緊張感が混ざり合っていた。先に来ている人間がいるだろうか、いるなら場所はどうやって分けようかと悩みながら、彼女は328号室の扉の前に立った。328号室。電子錠の無機質な音が静まり返った廊下に響き渡り、重厚な鉄の扉がゆっくりと開く。

部屋の中は予想以上に明るく、整頓されていた。午後の日差しが窓から差し込み、部屋中を満たしている。そしてその暖かな光を背にして、右側の机の椅子に座っていた女が、ゆっくりと首を回した。

ベージュのトレンチコートを膝の上に置き、ホワイトのニットワンピース姿で座っている女。172cmの長身を感じさせる長く優雅なシルエットと、一瞬で視線を奪う清純な目鼻立ち。プルムはその女の顔を確認した瞬間、時間が止まったかのような錯覚に陥った。

絶対に忘れられない存在だった。大学時代、法学部の連中が見向きもしなかった定期戦にフル出席し、そのたびに常に比較の対象となっていた顔。自分とは全く異なる魅力を持つ、E大法学部の象徴。

「……ユ・プルム？」

相手の唇から先に名前が零れた。困惑と驚愕が入り混じったその声は、間違いなくヨン・ムンギョンのものだった。プルムは握っていたキャリーケースの取っ手を無意識に強く握りしめた。この狭い地方ロースクールで、それも3坪ほどのこの部屋の中で出くわす確率がどれほどあるというのか。高校時代に数Ⅰで確率の計算方法を勉強したような気もするが、それがもう何年前のことか。すぐに計算などできるはずもなかった。

「……ヨン・ムンギョン？」

プルムもまた信じられないといった様子で名前を吐き出した。安堵と平穏を夢見て足を踏み入れた328号室は、ドアを開けて数秒も経たないうちに、大学時代のあの妙な緊張感でパンパンに膨れ上がった。2015年の春、二人の女の『新しい人生』は、こうして泥沼のような宿命とともに、火花を散らして始まったのだ。互いの一歩も譲らぬプライドと、熱を帯びた息遣いが交差する、逃れられない乱闘のゴングが今、鳴り響いた。

328号室の空気は、一瞬にして凍りついた。開かれたドアの隙間から流れ込む廊下のざわめきすら、この部屋の奇妙な真空状態に吸い込まれ、消滅していくかのようだった。まるでラジオ局の防音ブースにでも閉じ込められたかのように、外界から完全に遮断された錯覚に陥る。ヨン・ムンギョンはデスクチェアに座ったまま硬直しており、ユ・プルムはキャリーケースの取っ手を握りしめたまま敷居に縫い付けられていた。二人の視線が虚空で激しく絡み合う。驚愕と不快感、そして状況の荒唐無稽さが入り混じった、重苦しい沈黙が続いた。

先に口を開いたのはユ・プルムだった。彼女は呆れ返ったように乾いた笑いを吐き出し、視線を天井へと投げた。170cmの長身を持つ彼女が部屋の中へ一歩を踏み出すと、ただでさえ狭い寮の一室が、さらに息苦しく圧縮されたように感じられた。

「……これ、マジなの？ 冗談でしょ」

ムンギョンは生唾を飲み込んだ。頭脳が高速で回転する。ロースクールの入試で、彼女は『ガ（A）』群の選考でここを志願した。面接会場でユ・プルムの影すら見なかったのは、彼女が『ナ（B）』群で志願したからだ。地方大学は受験生の腹の探り合いを見越し、多数の志願者を確保するために両方の選考に窓口を開いているから、あり得ない話ではない。

おまけに、二人の女は腐っても名門大出身というちっぽけな意地（プライド）をこじらせ、もしかしての自校優遇を期待して自身の出身である名門大学にも志願していた。そして彼女らの母校たる名門私立大学は、複数の優秀な志願者を囲い込むため、一つの学群にしか窓口を開いていなかったのだ。

短い時間で素早く可能性を計算したムンギョンは、これはあり得ない話ではないのだな……と、心の底で深いため息をついた。なんという運命の悪戯か。

ともかく、すれ違った選考日程は、二人が同じ学校に合格したという事実を徹底的に隠蔽し、その結果が、この5坪ほどの空間における災厄のような再会だった。

「こっちが聞きたいわ。なんであんたがここにいるわけ？」

ムンギョンの声は平静を装っていたが、語尾が微かに震えていた。プルムはキャリーケースを引

きずりながら部屋に入り、踵でドアを小突いて閉めた。バタン、という鈍い音が二人の神経を逆撫でする。プルムはコートを乱暴に脱ぎ捨て、ベッドの上に叩きつけるように投げ置いた。その音が、二人の女にこの非現実的な感覚を無理やり現実なのだと直視させた。

「あり得ない。世間は狭いっていうけど、どうやったらルームメイトとして鉢合わせるのよ？　これ、学校側の悪趣味な嫌がらせじゃないの？」

ムンギョンもまた、負けじと席を立ち上がった。172cmの長身を誇る彼女が立ち上がると、二人の女の視線が同じ高さでバチバチと火花を散らして噛み合った。どちらも先に頭を下げる気など毛頭ない。8年前、あのドロドロだった定期戦の打ち上げでの記憶が、二人の脳裏をよぎった。だが、先に口を開いたのはプルムだった。

「あんたも分かってるでしょ？ 私たちが同じ部屋なんて無理よ」

プルムが単刀直入に言い放つ。ムンギョンは腕を組み、冷笑を浮かべた。

「当然ね。あんたと私が、こんな狭い部屋で肌を擦り合わせながら生活するなんてね。2007年のあの事、忘れたの？ 私はまだ、あんたの爪痕が首の後ろに残ってる気分だけど」

二人の間には、『2007年』という巨大な川が横たわっていた。ハタチそこそこの、自尊心が天を突いていた頃の肉弾戦。不器用でみみっちいキャットファイトだったとはいえ、あの日以来、二人にとって互いは『この世で最も顔を合わせたくない人種』として脳裏に刻み込まれたのだ。

その後も顔を合わせるたびに衝突がなかったわけではない。だが、卒業と国家試験の準備に追われるうちに、互いに記憶の彼方へと追いやられつつあった。『名門法大の女神』という過去のタイトルをそれぞれ背負ったまま、現実に打ちのめされ、己の境遇を後悔しながら時間を過ごすのに精一杯で、ちょうど互いの存在を忘れかけていたところだったのだ。

「今からでも事務室に降りて、部屋を変えてもらって。私も絶対に無理だから」

ムンギョンの冷ややかな言葉に、プルムが一瞬ピタリと止まった。彼女は窓の外を一度見やり、やがて唇を噛み締めた。

「……ダメよ。あんた正気？　明日が授業開始日なのよ。今からルームメイトを変えてくれなんて騒ぎ立てたら、私やあんた、同期全体にどういう風に広まると思う？『あのデカい女たち、性格もタダモノじゃないらしいぞ』なんて噂、最初から流されたいの？　　あんた、まだ承認欲求（かまってちゃん）捨てきれてないわけ？」

「……っ……」

その一点においてのみ、二人の利害は完全に一致していた。ムンギョンもまた、今回のロース

クール生活だけは静かに、まるで透明人間のように勉強だけに専念したかったのだ。弁護士になること以外、何も考えたくなかった。大学時代ずっと『法大の女神』だの何だのと、ありとあらゆるゴシップの中心に立たされていた頃の疲労感が、今でも彼女を重く押さえつけている。ここでまたルームメイトとの不仲で噂の的になるのは、自らロースクール生活をぶち壊すも同然だった。

「注目を浴びに来たわけじゃないし……とりあえず、大人しくしておくしかないか」

ムンギョンが自嘲気味に呟く。プルムもキャリーケースの上に腰を下ろし、頷いた。

「そうね。みっともなく事務室にお願いしに行くなんてごめんだわ。最低でも今学期は耐え抜こうじゃない。互いに、存在しない人間として扱うってことで。その後で、どっちかが出て行って一人暮らしするか、別のルームメイトを探すかすればいい。そうなれば、本気でガン無視できるでしょ」

彼女たちはもう、ハタチそこそこの分別のないガキではない。未成年ではないが、完全に大人とも言いきれない中途半端な存在でもなかった。高校時代に五択問題をちょっとばかり上手く解けたことや、その中ではそこそこ美人であるということを、いまだに武器にするほど愚かでもない。20代半ばから挫折を繰り返し、世間の厳しさを知った20代後半の女たちなのだ。

「いいわ。私も同意見。一学期だけ耐えてあげる」

表面上の合意は成立したが、心の奥底で煮え滾るような不快感は隠しきれなかった。ムンギョンは荷物を整理しようとするプルムの後ろ姿を睨みつけ、眉間を寄せた。ムンギョンの目に映るユ・プルムは、昔も今も『偽善の塊』だった。初めて顔を合わせた定期戦の打ち上げで、すぐに直感した。ラフなファッションでサバサバした女を気取り、自分の大学の男たちと薄汚れた食堂で鍋をつつきながら焼酎を煽るプルムの姿は、ムンギョンにとって嫌悪そのものだった。『私は美人だけど、性格もクールなの』というキャラクターを作り上げるために戦略的に振る舞う、その狡猾さ。その嘘くさい『クールさ』の裏で、男たちからの崇拝を貪り楽しむプルムの余裕が、ムンギョンは心底ムカついた。

一方のプルムもまた、ムンギョンを見ながら内心で舌打ちをしていた。プルムから見れば、ヨン・ムンギョンは『息が詰まるような清純可憐病の患者』だった。重い六法全書一つ自分の手で持てないようなか弱い表情を作り、周りの男たちを奴隷のようにこき使っていた姿。長いストレートヘアを掻き揚げて庇護欲を煽り、飲み会では他大学の男子学生にまで世話を焼かせていたあの卑怯な生存戦略が、プルムは反吐が出るほど嫌いだった。『清純巨乳の法大のアイドル』としてのチヤホヤだけを啜り上げようとしていたムンギョンを、プルムは心の底から嫌悪していたのだ。

172cmと170cm。CカップとCカップ。韓国の上位0.1%に君臨する、拮抗した知性と圧倒的な肉体スペックを持ちながら、その魅力のベクトルが正反対だった二人の女は、互いの存在そのものが許せなかった。何より、因縁の相手とこんな地方のロースクールまで都落ちして顔を突き合わ

せているという事実が、自分たちが最も隠しておきたかった『敗北の過去』を相手に曝け出しているようで、余計に腹立たしかった。

「さあ、不毛な感情の消耗はここまでにして、現実的な話をしましょう」

プルムが、部屋の中央を横切る薄いプラスチックのパーテーションを指先で軽く叩いた。

「ベッドは二つ、机も二つ。領域はキッチリ分けるわよ。ここは名前だけは『共有』だけど、実質的には『独立した不可侵領域』だと思わなきゃダメ」

部屋の構造は、窓を中央にして両側に分かれていた。ムンギョンはすでに片方のスペースに荷物を少し広げていたが、プルムは部屋の中を鋭い視線で舐め回し、地形の分析を始めた。構造は微妙だった。右側のスペースは、トイレがすぐ横に隣接している。

「右側の席はトイレに行くのが楽ね。深夜に目が覚めても、ルームメイトの目を気にせず静かに用を足せる。だけど……」

ムンギョンが先に口を開いたが、語尾を濁した。プルムがその隙間を抉るように、冷たく言葉を継ぐ。

「だけど、トイレが隣接してるってことは、相手が用を足したりシャワーを浴びたりする生々しい音を、ベッドに寝転がったまま丸聞きしなきゃいけないってことよね。このペラペラの薄い壁で、まともな防音なんて期待できる？　水を流す音から何から……耳がずいぶんと幸せになりそうね。あんたが覗き趣味の変態ならの話だけど」

逆に、入り口側の席はプライバシーの面で有利だった。トイレの騒音から相対的に解放され、部屋を出入りする際にルームメイトのパーソナルスペースを深く侵犯する必要がない。

「代わりに、入り口側の席はトイレに行くたびに、相手の領域をモロに貫通しなきゃいけない。パーテーションをめくって、寝てようが勉強してようが、その真横を通り過ぎなきゃならないのよ。それも相当なストレスでしょ。お互いにね」

二人はしばし言葉を切り、部屋の配置を穴の空くほど見つめた。これは単なる席決めではない。これから一学期の間繰り広げられる、『区分所有的な共有』のルールを定める、極めて重大な領土交渉なのだ。相手の生々しい生活音をリアルタイムで共有するのか、それとも相手の生活半径内に不快に侵入し続けるのか。

二人の視線が、部屋の奥、窓際とトイレが隣接した『右側の席』へと同時に向かった。5坪にも満たない空間におけるそのわずかな差は、ロースクール最初の学期のQOLを決定づける重要な領土だった。ムンギョンはトイレの騒音を甘受してでも、他人の目を気にせず出入りできる奥の席が喉から手が出るほど欲しかった。神経質な性格ゆえに、誰かが自分の横を通り過ぎるだけでも勉

強のリズムが崩れるのを極度に嫌ったからだ。

だが、ユ・プルムの考えも同じだった。彼女もまた、他人の領域を毎回貫通してトイレに行かなければならないという負い目に耐えるより、いっそ騒音に耐える方がマシだと判断していた。ただでさえデカい女二人が、狭い通路を挟んで繰り広げるマウントの取り合いなど、想像しただけでウンザリする。

「私が」「右の席を使うわ」

二人の女が申し合わせたかのように、同時に右側の席を使うと宣言してしまった。

「私が先に来たんだから、私が奥にするわ。荷物もすでにこっちに少し広げてるし」

ムンギョンが先占の正当性を盾に宣言した。すると、キャリーケースに斜めに腰掛けていたプルムが、片方の口角を歪めて冷笑した。

「先に来たのがなんだっていうの？ ここ、先着順でオープンランするデパートじゃないのよ？ 私も右側を使うつもりだったわ。私、荷物が結構多いのよね。あんたが陣取ってる机の横を毎回ウロチョロ行き来したら、あんたも鬱陶しいでしょ？」

「動線がごちゃつくのが嫌なのは私も同じよ。あんたが入り口側を使えばいいじゃない。出入りしやすくて好都合でしょ」

ムンギョンの言葉に、プルムは鼻で笑って立ち上がった。170cmのプルムがツカツカと歩み寄ると、172cmのムンギョンとの間に、息の詰まるような妙な圧迫感が空間に形成された。

「ヨン・ムンギョン、あんた相変わらずね。自分の都合のいいように立ち回るための言い訳ばかり。あんたが『トイレの音がうるさくて神経に障る』とか言って、夜な夜な私に無言の圧力かけてくるのが目に見えてるのに、なんで私がそんな面倒な席に執着しなきゃならないわけ？」

プルムはしばらくムンギョンをジッと睨みつけていたが、まるで大層な恩着せがましい態度で肩をすくめ、ベッドの上に投げ捨てていたユートを乱暴にひったくった。

「いいわ。私が譲ってあげる。あんたみたいに神経質な女が入り口側を使って、一晩中眠れなかったなんて私にヒステリー起こすザマを見る方がよっぽどおぞましいからね。私が少し不便な思いをしてやれば済む話よ。心の広い私が我慢してあげる」

プルムのトゲのある『譲歩』に、ムンギョンの眉がピクリと痙攣した。譲られたにもかかわらず、勝利した気分など微塵も湧かない。むしろ、自分の器が小さい人間のように貶められた気分になり、ムンギョンは氷のような微笑を浮かべて応戦した。

「譲歩って、おかしな言い方ね。本当は私も、あんたが入り口側を使った方がいいと思って、奥にするって言ったのよ？ あんた、サバサバぶってるけど、荷物のまとめ方を見てると案外ガサツで動線も無駄が多いじゃない。あんたに配慮して、私が騒音を全部我慢してあげようって言ってるのに、そんな言い草、ちょっと呆れるわね」

「配慮？ あんたの口からそんな言葉が出るなんて、ずいぶん新鮮じゃない」

プルムはねちっこく嫌味を言いながら、入り口側の机にバッグをドンッと下ろした。

「そうね。その『配慮』のおかげで、私はトイレに行くたびに、まるであんたの許可でも取るみたいに、あんたの領域を跨いでいかなきゃならないわけだ。音を立てないように、つま先立ちで歩いてあげるから、ありがたく思いなさいよね」

「ありがたいわね。通り過ぎる時、私の物にだけは触れないでちょうだい」

二人は互いに一歩も引かないまま、それぞれの領域へと散った。ムンギョンは奥の席を勝ち取ったにもかかわらず、プルムがトイレに行くたびに自分の背後を通り過ぎるという事実が、すでに背中に無数の棘を立てられているような不快感をもたらしていた。プルムもまた、狭い通路を抜けなければならない煩わしさを『譲歩の美徳』という仮面で覆い隠したものの、腹の中ではムンギョンの領域を通り抜けなければならないストレスに、早くも限界を迎えそうになっていた。

ムンギョンが最後まで嫌味たっぷりに言い放つと、プルムは気にも留めないふりをして肩をすくめ、キャリーケースから荷物を取り出し始めた。

「ええ、せいぜい音を堪能しなさい。私は他人の領域を通るのなんて別に気にならないし。どうせあんたは神経質だから、私が通り過ぎるだけでイライラするんでしょうけど、それはあんたが自分で処理してよね」

プルムの挑発に、ムンギョンの目尻が吊り上がる。しかし、ムンギョンは言い返さなかった。まだ荷解きを始めたばかりだというのに、328号室の空気はすでに極限まで張り詰めていた。170cmを超える二人の長身の女が同じ空間で動くたび、互いの服の裾が擦れ合いそうなほどのギリギリの緊張感が漂う。

ムンギョンはトレンチコートをクローゼットに掛けながら考えた。ここは勉強のための幽閉の空間でなければならない。だが、ユ・プルムという変数が登場した瞬間、この部屋はいつ爆発してもおかしくない時限爆弾を抱えた『泥沼の激戦区』へと変貌してしまった。ムンギョンは窓の外の冷たい2月の風を感じながら、これから繰り広げられる3年間の時間が、決して平坦なものではないことを直感していた。

部屋の中央のパーテーションはまだ折りたたまれたままだったが、二人の間にはすでに目に見えない不可侵の境界線が引かれていた。170cmを超える二人の女が狭い部屋の中で動くたび、空気

はちぎれんばかりに引き伸ばされ、荷物を解く音すら、相手の神経を削り取る鋭利な挑発のように響き渡る。2015年の春、彼女たちの『共有』は、今はまだ『配慮』という薄っぺらい仮面を被ってはいるものの、その深淵ではすでに、一歩も引けない意地の張り合いーー泥沼のキャットファイトが幕を開けていたのだ。